国際共修によるグローバル人材育成を目指した
大分大学国際フロンティア教育プログラムの
実践成果と今後の課題

ブルカート香織

本稿では「大分大学国際フロンティア教育プログラム」について紹介し、その実践による成果とそこで明らかになった今後の課題について述べる。国際フロンティア教育プログラムは限られた人的資源を有効活用し、21 世紀に必須とされるグローバル人材育成のために組み立てられた大分大学独自のカリキュラムである。令和元年から始まった本プログラムの修了者におこなったインタビューからプログラムの成果や今後の課題を考察する。

キーワード：国際共修、グローバル人材育成、キャンパスの国際化

１．はじめに

日本人の海外離れが進んでいるとか内向き思考と言われる昨今、また世界的パンデミックによって渡航したくてもできない状況が強いられる現状で、「内なる国際化」（末松 2017）はまさに時代の流れとともに必然的に進化していくものと考えられる。例年、大分大学では平均して約 40 名の正規学生を半年もしくは１年単位で交換留学生として海外へ派遣している。また、各学期終了後の短期語学研修も例年 30 名程度が参加している。ただ、総学生数が 6, 000 人弱のキャンパスではこの数値もほんの１％程度に過ぎず、本学国際交流推進戦略において掲げられる目標には届いていない。留学に興味を示す学生はいるが、カリキュラムの関係上、留学に伴い教育課程が長期化するといった懸念やそれに伴う経済的負担増を理由として、留学という選択肢さえ考えられない学生は少なくない。このような学生の懸念は日本だけでなく、米国の留学事情にも反映されている (Burkart, 2020)。このように留学という選択肢には教育課程の長期化やそれに伴う経済的負担はついて回る問題といえよう。

大分大学経済学部ではこの問題に対処すべく、International Business Program (IBP)というプログラムが設置され、学生にも人気がある。IBP は半年ないし１年の交換留学を教育課程の一部として位置づけ、留学先で習得した単位を一定の基準に従って認定するシステムをとっている。そのため、このプログラムを利用する IBP の学生は留学がまるでペナルティかのようによって生じる「留年」という事態を避け、４年間の学士課程を終了することができる。留学希望者の中には「高校生の頃に IBP のことを知り、留学するために大分大学に来ました」という学生も少なくない。ただ、やはり IBP は経済学部独自のプログラムであり、全学を見渡せば留学には先に述べたようなハードルが立ちはだかり、本学からの派遣者数は伸び悩むのが現状である。在学中に留学の有無に関わらず社会で求められるグローバル人材としての土台をいかにして築くかは、高等教育の現場に課された喫緊の課題といえよう。

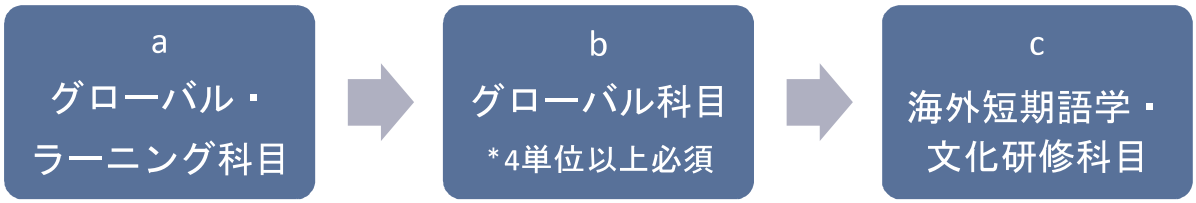
そこで本学では国際教育推進センターが中心となり、令和元年度より「大分大学国際フロンティア教育プログラム」が施行され、３年が経過した 2020 年度３月時点で、12 名の修了者を輩出している。本稿では本プログラムの紹介と実践による成果について述べる。またそこから明らかになった課題をまとめて今後の展望とする。

２．大分大学国際フロンティア教育プログラム

本プログラムはグローバル人材育成に必要な次の３つの能力を向上させることを目的とする：①異文化を知り、認め、そして理解する能力、②国際的視野をもち膨大にあふれる様々な情報やデータを適切に活用する能力、③英語やその他外国語を用いた異文化間におけるコ

ミュニケーション運用能力。この３つの能力向上に向けて、本プログラムは３つの領域（a グローバル・ラーニング科目；b グローバル科目；c 海外短期語学・文化研修科目）を設け、修了者として認定されるためにはそれぞれ必要な単位数を合計８単位以上（そのうち４単位以上はｂグローバル科目から）取得する必要がある（図１）。以下は各領域の科目設定の説明及び 2020 年度に開講された科目名を紹介する。

図１　大分大学国際フロンティア教育プログラム開設科目領域



２−１．a グローバル・ラーニング科目

グローバル・ラーニング科目では英語４技能のトレーニングを積みながらコミュニケーション能力の向上や学術的発信力を養いつつ、総合的な英語力の強化を目的として次の科目が設定されている（表１）。

表１　令和２年度（2020 年度）グローバル・ラーニング科目

科目名	単位数	開講学期
グローバル・ベーシックス	2	前期
トビタテ留学準備英語		
アカデミック・イングリッシュ Ｉ（リーディング＆ライティング）		
アカデミック・イングリッシュ II（スピーキング）		
留学英語 Ｉ（リスニング）		後期
留学英語 II（リーディング）		
グローバル・ベーシックス II		

例えばグローバル・ベーシックス（前期）及びグローバル・ベーシックス II（後期）においては１年生であること、または TOEIC が 500 点以下である２年生以上の学生に向けて提供される科目として履修制限をかけた。その背景には英語に自信がないことが留学に対する心の妨げになっていた学生でも安心して取り掛かることができるようにという意図が込められている。またすでに一定の英語力（TOEIC 600 点）がある学生に対しては、上記の英語科目の履修は必須ではなく、次のグローバル科目から履修することを勧め、学生の多様なニーズを満たし、英語力の向上を図った。

２−２．b グローバル科目

グローバル科目は大分大学に滞在する正規留学生や交換留学生と共に学ぶ、国際共修を推進する教養教育科目で、多文化共生の視点から多様な専門分野について学ぶことを目的として次の科目が設定されている（表２）。

これらの科目には使用言語が設定されており、特に英語のみで開講される科目については、欧米からの留学生を中心とした履修体制で、講義はもちろんのこと課題や授業中のディスカッションといった学習活動やコミュニケーションのすべてが英語でのみ執り行われる。そのため TOEIC 600 点程度の語学要件を課した。履修可否の最終決定は、授業担当教員が最終的に語学力やコミュニケーション能力を吟味して判断した。本プログラムの修了者として認定されるためには、上記で述べたように、全体で８単位以上を履修し、そのうちの少なくとも４単位以上はグローバル科目の一覧から取得する必要がある。

表２　令和２年度（2020 年度）グローバル科目

科目名	単位数	開講学期	使用言語
サステナビリティ大分 II	2	前期	日本語
日本語文法分析			
ビジネスジャパニーズ演習３			
ビジネスジャパニーズ演習４			
Japanese Grammar and Discourse		前・後期	英語
Sustainability and Glocal Development in Oita		前期	
The Politics and Economics of the EU			
Intercultural Communication			
Ethnographic Study on Rural Japan			
City Project: Oita and Beppu			
Globalization of Japan’s Economy			
狂言で大分を学ぶ			日　英
表現技術		後期	日本語
サステナビリティ大分			
日本語学 I			
Constructive Analysis of Semantic Structures in English and Japanese within the Framework of Cognitive Linguistics			英語
Introduction to Japanese Management			
The Politics and Economics of Globalization			
Introduction to Architecture			
Project Planning, Volunteering and Internship in Oita 3			
Japanese Popular Culture D: Manga Studies			
Sustainability and Global Development in Oita II			
ソーシャルネットワークと大分からの発信 II			日　英

２−３．ｃ 海外短期語学・文化研修科目

大分大学では全学に向けて海外短期留学プログラムを提供している（表３）。

表３　令和２年度（2020 年度）海外短期語学・文化研修科目

科目名	単位数	開講学期	授業形式
海外短期語学研修（韓国・ソウル女子大学校 I）	2	前期	集中
海外短期語学研修（韓国・ソウル女子大学校 II）			
海外短期語学研修（韓国・培材大学校）			
海外短期語学研修（韓国・釜山大学校）			
海外短期語学研修（英国・セントラルランカシャー大学 I）			
海外短期語学研修（英国・セントラルランカシャー大学 II）			
海外短期語学研修（台湾・開南大学）			
海外短期語学研修（台湾・東海大学 I）		後期	
海外短期語学研修（台湾・東海大学 II）			
海外短期語学研修（中国・江漢大学）			
海外短期語学研修（ドイツ・ライプツィヒ大学）			
海外短期語学研修（フィリピン・アテネオデマニラ大学 I）			
海外短期語学研修（フィリピン・アテネオデマニラ大学 II）			
ミニトビタテ海外研修			

これら研修は語学や文化研修が中心の２週間から５週間のプログラムで、前期終了後と後期終了後のいわゆる学期休みに提供されている。これらのプログラムに参加する場合、履修

登録をして担当教員の指導のもと、学内での事前指導を受け、実際に現地に赴き所定期間の研修を受け、帰国後にまた学内で事後研修に参加することで、２単位を取得することができる。これらの研修は交換留学ではなく、研修費がかかるため、前述のように経済的負担を懸念する学生にとってはハードルが高い。従って大分大学国際フロンティア教育プログラムの修了証授与の必須要件としての扱いはない。ただ、表３の研修に参加した場合、そこで取得した単位は前述の８単位の一部として換算できるものとした。

３．大分大学国際フロンティア教育プログラム修了者

令和元年度から始まった本プログラムも３年が終了し、令和２年度末には本学正規生の中から 12 名の修了者（経済学部 10 名、理工学部２名）を輩出した（表４）。修了時の学年別の内訳は２年 10 名、３年１名、そして４年１名であった。その 12 名中、半年もしくは１年間の交換留学（協定校への派遣留学でオンライン留学を含む）や海外短期語学・文化研修に参加したのはのべ７名であった。修了者は日本語母国語話者が 9 名、日本語以外を母国語とする正規留学生が 2 名、そして日本語と英語のバイリンガル*の学生が１名であった。

表４　令和元年度-令和２年度
プログラム修了者

学年	１年	０名
	２年	10 名
	３年	１名
	４年	１名
母国語	日本語	９名
	日本語以外	２名
	日本語・英語*	１名
学部	医学部	０名
	経済学部	10 名
	教育学部	０名
	福祉健康科学部	０名
	理工学部	２名

４．調査協力者及び調査方法

大分大学国際フロンティア教育プログラムの修了者に任意のインタビューに協力を依頼した。調査協力者は６名で、そのうち経済学部が５名、理工学部が１名であった。

調査方法としては、令和２年度後期の当初に修了証を授与された９名に研究協力を依頼し、承諾を得た６名に、Zoom を使用した１対１の半構造化インタビューを行った。インタビューに協力した６名の学年や留学の有無はそれぞれ異なるが、本プログラムに必要な単位（８単位以上）を取得しているところは条件が同じである。実際のインタビューの時間は 15 分から 45 分程度で、その内容は協力者の合意のもとに録画された。インタビューの質問は事前に協力者にメールで添付され、その質問に従ってインタビューを遂行し、データはコード化された。インタビューの質問内容は文末のインデックスの通りである。令和年度後期終了時に修了証を授与された３名については、インタビューの対象になっていなかったため、次回に依頼する予定である。

インタビューでは、４つの項目別に質問を作成した：１）大分大学国際フロンティア教育プログラムの概要について、２）グローバル・ラーニング科目について、３）グローバル科目について、そして４）本プログラムによって育んだグローバル人材としての Global Competence について。

５．分析

5-1. 国際フロンティア教育プログラムの概要について

まず本プログラムの概要や受講のきっかけや印象について、大枠で修了者に感想を聞いてみた。インタビューの質問は次の４つであった：

1. 大分大学国際フロンティア教育プログラムのことはどこで知りましたか？
2. 本プログラムに参加しようと思ったきっかけはなんですか？
3. 本プログラムを通して一番印象に残っていることはどんなことですか？
4. 本プログラムを後輩たちにお勧めしますか？それはなぜですか？

インタビューの協力者６名のうちほぼ全員が「大分大学国際フロンティア教育プログラム」に参加していたという自覚がなく、そのうち２名は卒業間際になって、修了証がもらえると知ったといい、驚きを隠せなかったという。それもそのはず、本プログラムが施行されたのは令和元年度（2018 年度）からで、本プログラムの概要や趣旨はその年度に発行された教養教育科目ガイドブックにはじめて掲載されている。つまり、それ以前に本学に入学しているインタビューの協力者たちは、本プログラムの情報や詳細について記された教養教育科目ガイドブックを所有していないため、知らなかったというのはあり得ない話ではない。

協力者から得た情報によると、６名中５名がそもそも本プログラムについては知らないまま、受講した科目が本プログラムのグローバル・ラーニング科目やグローバル科目であったため、知らない間に修了認定単位を取得していたという学生が多かった。1 名だけが、教養教育科目ガイドブックの裏表紙手前に記載された本プログラムや修了認定のことも知っていた。

本プログラムのプロモーションは決して十分とはいえない状況であったとはいえ、参加者の多くは入学当初から留学志向が高く、留学準備として英語の運用能力を高めるために受講したり、近い将来の留学生活を考えて、留学生との共修を希望したりして、自らの目標達成に直結するような科目を受講していた。また、中には「留学に行きたいと思っていたが、諸事情でその希望も叶わなかったので、英語で提供されるクラスを受講したり、留学生とともにまるで留学しているかのような状況で勉強したりしたかった」という学生もいた。本プログラムの修了者はグローバルや国際社会への意識が非常に高い集団であったといえる。

どの協力者も本プログラムに対しては好印象を抱いており、「英語を英語で習うというのは今まで経験したことがなく、初めはとても難しく思ったが、英語がそのまま頭の中に入ってくるようになった」とか「国際関係で提供されているクラスは（ディスカッションなどの）インタラクションがあって、それ以外の講義形式のクラスとは違って面白かった」という感想が述べられた。

後輩たちに本プログラムを推奨するかどうかという問いに対しては全員が勧めると答えた。その理由には「国際フロンティア教育プログラムの一環として提供されているクラスを受講して、留学生と仲良くなれたというのもあるけれど、留学や国際関係に興味のある友達ができた。授業が終わっても、今でも遊んだりご飯を食べに行ったりするような仲のいい友達ができた。」という。「その時に知り合った留学生とは、彼らが母国に帰った今でも SNS を通じて連絡をしているし、実際留学したときに会ったりして、海外がもっと身近に感じられた」という感想もあった。また、「毎週継続して英語を話す（使う）機会を作るというのはとても大切だと思うし、このプログラムを使えば、それが実現するので、絶対おすすめです」という意見や「グローバル化は進んでいく。日本（大分）にいてグローバル化に備えた知識や意識を高めていける貴重なプログラムなので、今ここでできることをしたほうがいい」と後輩たちへのエールが飛んだ。

5-2. グローバル・ラーニング科目について

総合的な英語によるコミュニケーション能力の向上を推進するために設定されたグローバル・ラーニング科目について次の４項目について質問した：

1. 総合的な英語力の強化を図るため、（クラス名）を履修していますが、英語力の強化に十分につながったと思いますか？理由は？
2. 英語力の強化によって、あなた自身の異文化間コミュニケーション能力にどのような違いが見られましたか？
3. 現時点で、英語の学力を示すものはありますか（英検１級、TOEIC 770 など）
4. 異文化間コミュニケーションにおいて何が一番大切だと思いますか？

インタビューの協力者全員がグローバル・ラーニング科目の履修によって、総合的な英語の運用能力が向上したことを挙げた。特に今まで学んできた「英語」の授業とは異なり、英語を使ってコミュニケーションをとり、自分の考えを伝えることの大切さや難しさを知った

という学生が多かった。このプログラムに参加した全員がなんらかの英語力を示す指標があり、TOEFL であれば 516 点や 530 点等、英語圏や準英語圏に留学できるほどの力をつけていた。また、TOEIC では 695 点、815 点、そして最高で 900 点という学生もいた。また 1 年生が修了した春休みにフィリピンのアテネオ・デマニラ大学の海外短期語学研修に参加した学生は、５週間の研修を通して TOEFL が 427 点から 483 点へと 50 点以上も急上昇した学生がいた。これらの数値は短期語学・文化研修や交換留学への参加の有無に関わらず、このインタビューに協力してくれた学生の自己報告であるが、彼らの中で英語を使うという運用能力が向上したという自信に繋がったことは間違いない。

また、英語のディスカッションを通して、意識して英語を使う機会が増えたことで、少しずつ英語で話されたことを聞き取れるようになったり、内容を理解できるようになったりして、最終的に自分の想いも伝えられるようになってきたことが上向きのスパイラルとなり、英語でコミュニケーションを取ろうとするモチベーションも上がり、行動する勇気も湧いたという報告もあった。そこで異文化間コミュニケーションにおいて何が一番大切かという問いについては、次のようなキーワードが挙がったので表５にまとめた：

表５　異文化間コミュニケーションにおいて何が一番大切かという問いに対する反応

恐れないで、話す**勇気**	相手の文化を**理解**して受け入れること
間違えてもいいという**開き直り**	異文化**理解**に徹することの大切さ
自分の**心を開く**こと	相手との（文化などの）違いを**知り**、正しく**理解**すること
モチベーション	相手のニーズを**察知**する
勉強する**意欲**	自分のことを**知る**こと
異文化を知りたいと思う**興味や関心**をもつ	自分（日本にいる日本人）が majority であることを**理解**すること
他人を**思いやる**こと 相手わかろうとする**態度**	Input の力（**知識**）をつけること
興味・関心・意欲・態度・勇気・思いやり	**知識・知ること・理解・理解すること**

5-3. グローバル科目について

グローバル科目とは国際共修を推進し多文化共生の視点から多様な専門分野について学ぶことを目的とした教養教育科目で、少なくとも２科目（４単位）を取得することが修了の条件となっている。インタビュー協力者には次の４つの質問をした。グローバル科目全体を通した感想を表６にまとめた。

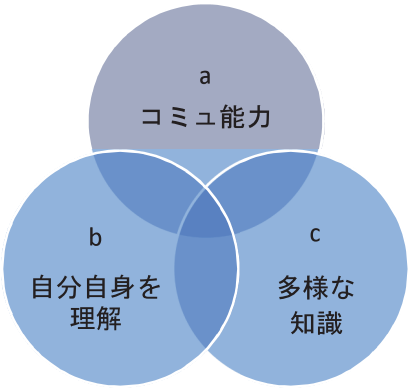
1. 数あるグローバル科目の中でなぜこのグローバル科目を選択したのですか？
2. 履修したグローバル科目の中でどの授業が一番印象に残っていますか？それは具体的にどんなことですか？
3. 留学生と共に学ぶグローバル科目の中で、特に留学生との関わりが深かったのはどの授業ですか？またその中で具体的にどんなことを学びましたか？
4. 少なくとも４単位のグローバル科目を履修して、一番身についたと思われるのはどんなことですか？

表６　グローバル科目を履修して

<table>
<tr><td>留学生から日本とは異なる諸外国の色々な話が聞けて**面白かった**。</td><td>英語でのコミュニケーションは**難しかった**が、**自分の伸び代**を感じた。英語の表現をまねしてみたいと思った。</td><td>初めは宿題だから国際的なニュースを読んでいたが、そのうち日常生活になって、世界のことに**興味が湧いた**。</td><td>日本独自の文化の一つと思っていたマンガについて**客観的な視点**で学べたのは面白かった。</td></tr>
<tr><td>留学生と一緒に色々なことを学ぶのは**楽しかった**。</td><td>初めて留学生の中に入って英語で授業を受けた。**辛うじて**内容は理解できたが、発言するまでには至らなかった。</td><td>国際的時事問題の知識が増えたらもっと知りたいと思っていくうちに知ることが楽しく、**自信**につながった。</td><td>日本語を一つの外国語として**客観的に学び**、留学生に教える機会は貴重だった。</td></tr>
<tr><td>留学生と一緒に４−５人くらいの小さなグループ・ディスカッション形式で学ぶのは**新鮮だった**。</td><td>アカデミックの環境では**自分の英語力**グループディスカッションで何かを伝えるという以前の段階だった。</td><td>異なる文化が交わる中でも**人との関わり合いが特別に大切**だとわかった。</td><td>**自分（母国・日本）の文化が軸にあってこそ**他の文化との相違を見つけられると気づいた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">**新鮮さ・楽しさ・面白さ、異文化**</td><td rowspan="2">**英語の運用能力不足を実感、語学力・コミュニケーション能力の必要性**</td><td>**国際社会につながる自分という存在**</td><td>**客観的視点からみた母国や自分を再発見**</td></tr>
<tr><td colspan="2">**日本人としてのアイデンティティ**</td></tr>
</table>

5-4. Global Competence について

インタビューの締めくくりとして協力者に以下の二つの質問を投げかけた。Burkart（2018）はグローバル社会でリーダー的役割を果たすためには次の３つの要素がバランスよく発達していることが望ましいとし、その３要素がそれぞれどれくらいのウエイトを占めるかどうかを協力者に 100 分率で示してもらった。その回答は下の表７のようにまとめられた。



a.　異文化間のコミュニケーション能力；
b.　自分自身や自国の文化について理解する能力；
c.　母国や外国の文化社会制度などについての知識

表７　Global Competence の内訳

協力者	A	B	C	D	E	F
a　コミュ能力	１番大切	50%	40%	50%	50%	50%
b　自分自身を理解	２番目	25%	40%	30%	25%	20%
c　多様な知識	３番目	25%	20%	20%	25%	30%

また研究協力者がその内訳について説明した内容を次にまとめた。

協力者A

この３つについてはパーセントで表すのは非常に難しいので大切だと思う順番で、a→b→c とした。ただ、この３つはそれぞれ密接に関連しているので、そのうちの一つが著しく欠けていたらグローバル社会でリーダー的役割は果たせないのではないかと思う。

協力者B

グローバル社会でリーダー的役割を果たすには、英語を喋れる、喋れないは別として、まず相手の心を掴みにいくということだと思う。異文化間のコミュニケーション能力が自分にとっては一番ウエイトが大きくて、b と c はその扉を開けてからの話だと思う。

協力者C

コミュニケーション能力や自分自身について学ぶインプットはグローバル社会のリーダーには必須アイテムである。自分のことを知らないと、うまくコミュニケーションだって取れないから。知識が 20%になっているのは、これからもっと多様な知識を学んでいくと思う。そうすると知識が占める割合が増えていくと思われる。

協力者D

留学生の中に入って授業を受けていると、自分は「日本人」として意見を求められる。日本人ばかりいる授業の中では日本人としての意見などは求められない。つまり、まるで「日本人代表」かのように意見を述べなければならない環境が特殊であり、新鮮だった。本で学ぶという意味での知識の比重はそう重くないのではないか。もっと外に出て、実際にいろいろなことを体験してその中からグローバル社会に必要な要素を学んでいくのだと思う。

協力者E

b と c を元にして a で確かめるという構図を考えた。知識や自分のことについてはインプットとして入ってくるもので、それを元にアウトプットする手段として異文化間のコミュニケーションが必要になってくるのだと思う。つまり、異文化間コミュニケーション能力(a)が 50%で、b と c を合わせて 50%となるのではないかと思う。

協力者F

この内訳をするのは難しい。この３要素のどれも大事。リーダーという役割と考えたら、日本人の間でも誰とでも平等に話せる人でなければならない。これがグローバル社会の中のリーダーとなると、さらに多様なグループをまとめていかなければならない。ニュースなどの予備知識はとても大切。社会のリーダーとなるには一点じゃなく、もっと多角的視点から物事を捉えられなければならない。また自分で物事が判断できなければならない。外に出る前に、自分の文化や自分のことを知らなければならない。海外に出たら余計にそう思った。

本インタビューの最後に協力者それぞれに本プログラムを修了して一番自信がついたこと、またこれからさらに伸ばしていきたことについて質問した。そのまとめは次の通りである。

表８　一番自信がついたこと、これから伸ばしていきたいこと

協力者	一番自信がついたこと	これからさらに伸ばしていきたいこと
A	**積極的に話す姿勢**、文化的背景や生い立ちも違う人（自分の周りの人々）のことを**理解しようという姿勢**、**理解したいという気持ち**。	相手のことを理解したいという姿勢を示しながら、**英会話力や異文化コミュニケーション能力**を駆使しながら、意思疎通を図っていきたい。
B	聞かれたことにぽんぽんと答えられるようになった。今までやってきたこと、今まで受けてきた授業が何につながるかと考えながらやってきた。**自分の目標に向かってやるべきことをやってきた**。それが今の自信となった。	自分がやりたい**大きな夢に向かって**、もっと**英語を勉強**して、**世界に発信**していきたい。
C	「国際」についてたくさん知識をつけた。**自分がこれまで学んだ知識**が自信につながった。	逆に、知らないことがもっとたくさんあるということがわかったので、これから**もっと知りたいという意**欲が出た。これからも**もっと勉強していきたい**。
D	**人とコミュニケーションをとる（英語でコミュニケーションをとる）**ということについては自信がついた。海外に出たら、**マイノリティ**。アジア人として生活した。日本に帰れば**マジョリティ**。**その違いの中で持つ意味を考えられるようになった**。	**マイノリティの立場、マジョリティの立場それぞれの立場**を経験して、それぞれの思いがわかるようになった。そのことを生かして、これから**もっと自分のこと（国）についても他の国のことについても学んでいきたい**。
E	**外国人と気軽に友達に**なれるようになった。留学はしたことはないが、日本にいる**外国人と関わるということが当たり前**になった。	グローバル社会の中で、**日本にいても積極的にコミュニケーションをとっていき**ながら、**国籍に関わらず、良い関係性**を築いていきたい。
F	いろんな壁にもぶつかってきたけど、どうにか乗り越えてきた。留学中も言葉さえ通じない中で苦しい経験もしたが、**めげずに努力する姿勢を認められた**。これからも**難しいこともどうにかやって成し遂げられる「何でもできる！」っていう気**がする。	この自信を元にこれからも**自分で目標を定めて、それに向かって努力**していきたいと思う。
まとめ	**知識の集積や多様な経験から、自他の違いを尊重することの大切さ、努力して何かを勝ち取ることの難しさ、そしてその時々に必要な勇気、自主性、積極性を学んだことが自信につながった。**	**これからも積極的に総合的な英語運用能力の向上に努めたい。マジョリティの立場やマイノリティの立場といった多角的異なった視点から物事を捉え、異文化間の良好な関係を築いたり、円滑な異文化間コミュニケーションを継続したりしていきたい。そのためには自分の目標を定めてその達成のために努力していきたい。**

６．考察

6-1. 国際フロンティア教育プログラムの概要について

国際フロンティア教育プログラムについては本インタビューの協力者からも高評価を得ている。大きく改善しなければならないことがあるとすれば、それは本プログラムをもっと積極的にプロモーションしなければならないということである。インタビューに参加した６名中、１名だけが本プログラムの趣旨や概要を知って参加しており、本プログラムが大分大学全学に向けたプログラムであるのに、学内での知名度が非常に低かったことが明らかとなった。本プログラムが始まって３年経過しているにもかかわらず、その状況が変わっていないというのは、非常に問題である。また５学部あるうちの２学部からしか修了者が輩出されていないところを見ても、周知徹底に問題があることは否めない。新学期に教養教育科目ガイドブックを配布する際に本プログラムについてプロモーションするのが最もタイムリーであろうが、通常オリエンテーションの一環であり、膨大な資料や通知、インフォメーションが飛び交う中、その時間を割くのが難しいという意見が教育支援課からも寄せられている。

インタビュー時に国際フロンティア教育プログラムとして履修した授業について協力者にリマインドしたが、当時履修した授業を思い出しながら、他の教養教育では味わえなかったようなユニークで新鮮な経験をしたといい、修了者の誰からも後輩に勧めるという感想が述べられていた。そこで、修了認定者からの体験談を話してもらうことも一つのプロモーションの方法とも考えられる。

6-2. グローバル・ラーニング科目について

総合的な英語の運用能力を高めるために設けられたグローバル・ラーニング科目であるが、英語の運用能力に合わせて多様な授業が設定されている。中でもグローバル・ベーシックスおよびグローバル・ベーシックス２においては、今まで英語が苦手で自信がないという学生のために設定され、英語を使って基本的な意思疎通ができるようなトレーニングを重視しているため、15 週間の授業が完結する頃には、受講者は英語で何らかの発表ができるようになる。また、留学を控えた学生向けや将来留学したいという学生向けに設定された科目はそれぞれのレベルに応じた授業展開をしているため、教育効果は非常に高いと言える。ただ、今回のインタビューで抽出した英語の語学試験等の結果は留学の有無や学年の違い等もあり、そのまま比べることができないが、インタビュー協力者はそれぞれ英語の運用能力を高めていることがわかった。

また、異文化間コミュニケーションにおいて何が一番大切かという問いに対する答えが大きく分けて二つのポイントとなって浮かび上がった。一つは異文化について知りたいという興味や関心を抱き、言葉や文化の壁を恐れず、間違ってもいいから勇気を出して、コミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を育み、他人を思いやる心で相手を分かろうと努力する姿勢が大切であるという発話者の興味、関心・意欲・態度といった心理的な姿勢が中心であった。もう一つは異文化について正しく理解するばかりではなく、自分の文化や自分自身について理解を深めることで、偏見のない適切な知識を身につけられるとし、自他に関する知識や理解を深めることがより良い異文化間コミュニケーションを築くという結論に至った。

6-3. グローバル科目について

グローバル科目についてインタビュー協力者から得た感想をまとめると、大きく分けて４つのコードに分けられた。一つ目は今までの教育環境と異なり、留学生とともに学ぶ国際共修の環境から得られた新鮮さや面白さ、また留学生と共に学ぶ楽しさが挙げられた。二つ目は同じく留学生と英語で学ぶという環境の中で、自分自身の英語の運用能力の欠如を思い知らされたという苦い経験についても言及されることが多かった。３つ目は日本の文化を留学生と一緒に学ぶことにより、客観的な視点から日本や日本文化について自己の再発見ができたこと。最後に、国際社会について学ぶにつれて、国際社会の中に置かれた日本という位置付けや自国の文化というものを背負う自分自身の位置付けを再確認したことが挙げられた。これは嶋内（2014）が新聞紙面を用いて「社会が求める『グローバル人材』とは何なのか」

を分析して抽出された一つの要素である「日本人としてのアイデンティティ」に相当すると思われる。

このように日本にいながら留学生とともに学ぶ「国際共修」というユニークな学習環境は非常に恵まれているといえる。特に国内外の移動が制限されている現在のコロナ禍の状況においては、あえてこのような学習環境を選ばない限り、実際に留学するということは難しい。世界的パンデミックを引き起こしている新型コロナウイルス感染症がいつ収束するのかという目処がつかないまま、在学生は今までとは違った形でグローバル教育を受けていく必要があるのではなかろうか。

6-4. Global Competenceについて

本インタビューでは参加者の Global Competence について調べたが、a) 異文化間のコミュニケーション能力、b)自分自身や自国の文化について理解する能力、c) 母国や外国の文化社会制度などについての知識を 100%で表してみると、ほぼ全員が a) 異文化間のコミュニケーション能力を最も重視していることがわかった。ただ、中にはこの３つの要素のバランスが重要だと考える学生やそのバランスはこれから自分がどのように過ごしていくかで変わっていくだろうと考える学生もいた。本インタビューを通して明らかだったのは、協力者が全員、グローバル・リーダーであることを意識し、自分がそうあるべきであるという前提でインタビューに答えていた。つまり、本プログラムを一つのきっかけとして、彼らは多様なグローバル教育を受け、ユニークな学習環境で学んだ。そこから得た知識や経験が彼らのグローバル・リーダーとしての素地を育み、表８で表現したような自信へとつながったと考えられる。

インタビューの最後にこのプログラムを通して一番自信がついたことや、これからまたさらに伸ばしていきたいところを聞いたが、彼らは多様な知識や経験から、自他の違いを尊重することの大切さ、努力して何かを勝ち取ることの難しさ、そしてその時々に必要な勇気、自主性、積極性などを学んでおり、これまでの自分の学びや経験の軌跡を振り返って、グローバル・リーダーとしての自信をつけたと考えられる。また、その軌跡を振り返ることによって、これから何が必要なのか、どのように舵を取っていけば良いのかといった展望も示されていた。彼らの言葉からも反映されているように、これからも積極的に総合的な英語運用能力の向上に努め、マジョリティの立場やマイノリティの立場といった多角的で異なった視点から物事を捉えることを忘れず、決して国境で仕切られただけの異文化間という枠組みの中だけではなく、もっと広い意味での異文化間のコミュニケーションを円滑に図り、継続していってくれるに違いない。彼らのインタビューからは、グローバル・リーダーとしての自信と遂行能力が表現されていた。

７．まとめと今後の課題

「大分大学国際フロンティア教育プログラム」について紹介した本稿では、令和元年から始まった本プログラムの修了者におこなったインタビューからプログラム実践による成果をまとめた。国際フロンティア教育プログラムは現存の教養教育科目であり、留学生と本学正規学生に開講して、グローバル・ラーニング科目とグローバル科目を構成しているため、本プログラムの施行よる教職員の実質的負担は抑えて開設することができた。また、海外短期語学文化研修で教養教育の単位が取得できることも、参加する学生にとってはプラスとなっている。改組などによる教職員の人員削減で人的資源が逼迫する教育現場で画期的なプログラムを設置するのは難しいところで、このような工夫は必須である。

本プログラムの英語による授業は交換留学生を対象とした授業が多く、それを正規生にも提供することで、国際共修を実現している。ただ、英語で提供される教養教育科目は希少であり、中でも各学部から提供されているのは各学期４科目しかない。嶋内（2014）は専門科目を英語で履修するカリキュラム政策が日本の大学教育の再考に必要であり、英語による授業を担当できる教員が不足しており、その確保のためには既存の教員にインセンティブを与えたり、海外留学経験のある若手研究者やポスドク及び非常勤講師を積極的に採用したりといった手段を講じる取り組みが必要だと言及している。急速なグローバル化によって、留学

生の獲得競争が激化し、日本の研究力の衰えが指摘される中、今後どのようにキャンパスの国際化を推進していくかを検討する必要がある。

本稿では「大分大学国際フロンティア教育プログラム」を修了した学生６名の任意のインタビューによって、本プログラムの実践を通した彼らのグローバル・リーダーとしての成長を記録した。本プログラムは参加者に総合的な英語の運用能力を高め、彼らの自主性や積極性を支援しながらグローバル・リーダーとしての自覚と自信を育んだことが明らかになった。ただ、これはあくまでケーススタディの域を脱せず、インタビュー協力者の元々の英語力や留学経験の有無等、多様な変数が関係していることは言うまでもない。つまり、インタビュー協力者によって大きく答えが変わるかもしれないという可能性も秘めている。ただ、今回の６件の事例からは本プログラムが参加者に著しくポジティブな影響力を及ぼしたことは明らかであった。今後も本プログラムの修了者が輩出されるに伴い、もっと情報を収集し、本プログラムの成果を検証していく必要がある。国際共修カリキュラムは現在日本の大多数の高等教育現場で導入されている。その成果が満足いくものであるかどうかは大学の理念や指針によって常に吟味されるべきである（末松 2017）。つまり、大学の理念や指針に具体的かつ現実的な国際化施策を立て、カリキュラムとして位置付けなければ、キャンパスの国際化は難航するだけであろう。

また、本インタビューではユニークな国際共修という経験や体験から、グローバル・リーダーとしての姿勢や知識を学び取ったという感想が強調された。大学内において留学生支援ボランティアの制度を設けるなど国際交流活動の環境を整えることは非常に効果的である（久保田・鈴木 2015）。今後は授業だけでなく、身近な環境でボランティアやサービス・ラーニングなどといった多様な学内外の経験を通して学んでいくような体験型国際共修を含むカリキュラムを検討していく必要がある。

コロナ禍の状況で、国内外の行き来が制限する中でも、オンライン授業を実施し、留学生と日本人学生の国際共修は継続され、本プログラムも継続的に留学生と正規生の共修に尽力してきた。今後もこのような状況が続くと考えられ、またこのような状況は否が応でも働き方改革に一役買っている。今後は海外とのやりとりは実際に現地に赴くのではなく、オンライン上で行われる可能性は高い。このように広くグローバル化が進み、海外とのやりとりは一部の限られた人員だけではなく、もっと広く一般的に求められるようになると考えられる。つまり、世界的パンデミックは人流の動きを著しく制限した一方で、情報社会の中のグローバル化をさらに広め、その存在を顕著にしたのは間違いない。そのようなグローバル化社会における高等教育の現場ではグローバルな知識をもち、物事を多角的に捉えて理解することができる異文化感受性や適応力が高く、異文化間の円滑なコミュニケーションを図ることができるグローバル・リーダーを育成することが強く求められている(Burkart, 2020)。本稿から、「大分大学国際フロンティア教育プログラム」はその要求に大きく貢献しているといえよう。

参考文献

久保田美映・鈴木理小（2015）「日本語ボランティア活動がグローバル人材育成につながる可能性―留学生対象日本語授業に参加した日本人大学生 A さんの事例から―」Obirin Today―教育の現場から―

嶋内佐絵（2014）「グローバル人材育成と大学の国際化に関する一考察」横浜市立大学論叢人文科学系列 Vol. 66 No. 1: 109-126

末松和子（2017）「『内なる国際化』でグローバル人材を育てる―国際教習を通したカリキュラムの国際化―」東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要 3 巻 41-51

Burkart, K. I. (2018). Preservice Teachers' Intercultural Sensitivity and Global Competency. *Florida Association of Teacher Education Journal, 3*(1), 7-25

Index

＜国際フロンティア教育プログラムについて＞

1. 国際フロンティア教育プログラムのことはどこで知りましたか？
2. 国際フロンティア教育プログラムに参加しようと思ったきっかけはなんですか？
3. このプログラムを通して一番印象に残っていることはどんなことですか？
4. このプログラムを後輩たちにお勧めしますか？それはなぜですか？

＜プログラム１　総合的な英語力の強化について＞

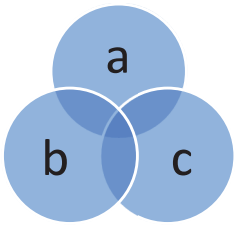
1. 総合的な英語力の強化を図るため、____クラス履修をしていますが、英語力の強化に十分につながったと思いますか？それはなぜですか？
2. 英語力の強化によって、あなた自身の異文化間コミュニケーション能力に向上が見られましたか？それはなぜだと思いますか？
3. 現時点で、英語の学力を示すものはありますか？（e.g., 英検１級、TOEIC 770 など）
4. 異文化間コミュニケーションにおいて何が一番大切だと思いますか？

＜グローバル科目について＞

1. 数あるグローバル科目の中でなぜこのグローバル科目を選択したのですか？
2. 履修したグローバル科目の中でどの授業が一番印象に残っていますか？それは具体的にどんなことですか？
3. 留学生と共に学ぶグローバル科目の中で、特に留学生との関わりが深かったのはどの授業ですか？またその中で具体的にどんなことを学びましたか？
4. 少なくとも４単位のグローバル科目を履修して、一番身についたと思われるのはどんなことですか？

＜Global Competence and Intercultural Sensitivity>

1. グローバル社会でリーダー的役割を果たすためには次の３つカテゴリーが必要だと言われています。あなたの中でこれはどれくらいのウエイトを占めますか？
   a. 異文化間のコミュニケーション能力
   b. 自分自身や自国の文化について理解する能力
   c. 母国や外国の文化社会制度などについての知識



100%

2. 国際フロンティア教育プログラムを終了して、一番自信がついたことは何ですか？またこれからさらに伸ばしていきたいことはどんなことですか？